

令和四年度出土遺物公開事業

柏北部東地区の遺跡展

ちちゅう

地中からの目覚め

め

そ



小山台遺跡の大珠



小山台遺跡の志野鉄絵丸皿



旧石器時代の槍 試作品
(橋本勝雄氏作成)



駒形遺跡の装飾器台



画像提供：千葉県教育委員会／三井不動産

柏市郷土資料展示室

令和4年7月23日 土曜～9月18日 日曜

船橋市飛ノ台史跡公園博物館

令和4年10月15日 土曜～11月27日 日曜

千葉県立中央博物館

令和5年1月21日 土曜～2月26日 日曜

[主催]公益財団法人千葉県教育振興財団
[共催]千葉県立中央博物館 柏市教育委員会 船橋市教育委員会
[後援]千葉県教育委員会

[問い合わせ]公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター ☎043-424-4850

ごあいさつ

当財団では、昭和49年の創立以来、国等機関による開発事業に伴って、1千か所を超える遺跡の発掘調査を行い、県内各地の歴史と文化を伝える貴重な資料を得ることができました。その成果は、展示会や遺跡見学会、ホームページ、広報紙『房総の文化財』などで、紹介してまいりました。

今回の展示会は、柏北部東地区の土地区画整理事業に伴って発掘調査を行った遺跡の調査成果を中心にして、「柏北部東地区の遺跡展－地中からの目覚め－」と題して紹介するものです。この地域の、旧石器時代から近世までの出土資料をとおして、多様な文化のようすを知っていただき、埋蔵文化財の重要性と保護の大切さを御理解いただければ幸いです。

最後になりましたが、御協力を賜りました関係機関並びに関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

公益財団法人 千葉県教育振興財団

- 凡例
1. 本図録は、令和4年度出土遺物公開事業「柏北部東地区の遺跡展」の展示解説図録です。
 2. 展示資料の所蔵先は、別紙の展示資料一覧のとおりです。
 3. 本展示は、文化財センター長 木原高弘・調査第二課長 島立桂の指導のもと、主任上席文化財主事 上守秀明、上席文化財主事 當眞嗣史、文化財主事 石毛弥一郎が担当しました。
 4. 図録の執筆・編集は、第I部橋本勝雄、第II部上守(第II部1・3・4・トピックス)・小林清隆(第II部2)、第III部當眞・石毛、第IV部津田芳男が担当しました。
 5. 本書掲載の図版の提供や出典等については、巻末に記載しました。
 6. 本展示の企画・開催、資料借用ならびに本書の編集にあたり、千葉県教育委員会をはじめ、関係諸機関、関係者の御指導、御協力を賜りました。ここに御芳名を記し、深く感謝の意を表します。
- 団体 柏市教育委員会 柏市郷土資料展示室 埼玉県富士見市水子貝塚資料館 千葉県教育委員会
千葉県立中央博物館 船橋市教育委員会 船橋市飛ノ台史跡公園博物館
- 個人 大谷弘幸・隈本健介・小宮雪晴・谷口友希・西川博孝・西野雅人・畑山智史・和田晋治(以上、五十音順、敬称略)

柏北部東地区の概要

柏北部東地区は、つくばエクスプレス柏たなか駅を中心に、約128ヘクタールの規模で計画された土地区画整理事業です。この地区には、利根川右岸の低く平坦な台地上に、縄文時代を中心とする13遺跡が所在します。当財団では、平成10年度から平成28年度に、約57ヘクタールについて320回の発掘調査を行い、その成果を15冊の報告書にまとめました。

柏北部東地区の遺跡は、南北に走るつくばエクスプレスを境に、西側に駒形遺跡、富士見遺跡、大松遺跡がまとまり、さらに西側から南側の地区周縁部に、花前Ⅰ～Ⅲ遺跡、矢船Ⅰ・Ⅱ遺跡、館林Ⅱ遺跡、原畑遺跡が分布しています。東側は、小山台遺跡、寺下前遺跡、八反目台遺跡が台地上に連続しています。なお、当初は約170ヘクタールの計画面積でしたが、2度の変更があり、現在の規模になりました。

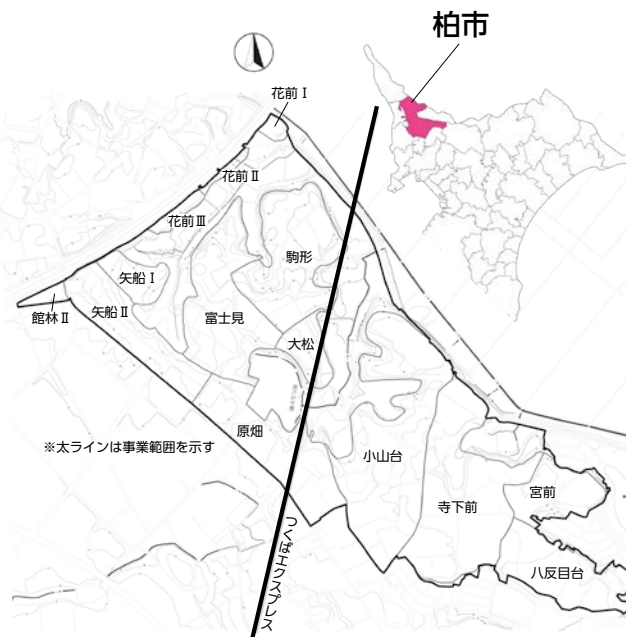


図1 柏北部東地区主要遺跡位置図

第I部 旧石器時代

1 旧石器人の暮らし

柏北部東地区では、11か所の旧石器時代遺跡が所在し、約17,000点もの遺物が発見されています。これらは質、量ともに備わり県内屈指の資料として全国的に知られています。

遺跡は、手賀沼に注ぐ、大堀川、地金堀、大津川などの河川の支流や利根川低地に面する台地の縁辺部に石器の分布が集中し、平坦な台地中央部にはほとんどありません。このような立地は下総台地における格好のモデルケースといえます。そして、その背景には飲料水や水辺の狩猟・漁労等があります。



図2 キャンプの風景



図3 旧石器の出土状況(富士見遺跡第7ブロック)南から

人々の生活の痕跡としては、ブロック、礫群、住居跡、炉跡、土坑が発見されていますが、ブロックと礫群が主体であり、住居跡などの遺構が発見されることは稀です。また、酸性土壌のため、木や骨などの有機質の遺物は消失し、石器のみが残存しています。したがって、旧石器時代における人間集団の生活を明らかにするためには、石器研究が基本的、かつ主要な研究となります。

石器は単独ではなく、直径数mの範囲にまとまって出土するのが通例で、この石器のまとまりは、専門用語で「ブロック」(遺物集

中地点)と呼ばれており、柏北部東地区でも247か所のブロックが発見されています。

ブロックは、数点から数百点の石器で成り立っており、作業や生活の場を示すものと考えられています。各遺跡が、ひとつのブロックで構成されることは非常に少なく、多くは複数のブロック(「ブロック群」)が単位となっています。

ブロックには、加工された石器(利器)だけの場合と、利器と多量の石片で構成される場合があります。これは、ブロック内で行われた作業の違いによるものであり、前者では、他の遺跡やブロックで製作された石器を持ち込み、石器製作以外の何らかの

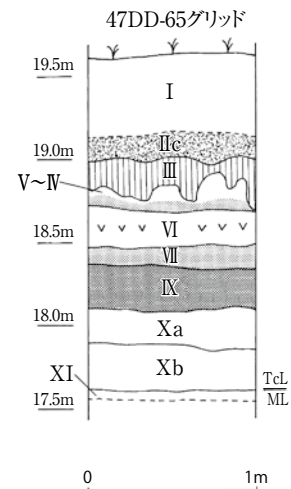


図4 柏市原山遺跡の基本土層(柏北部中央地区)

作業が、後者では、そこで石器製作が行われていたことが理解されます。

このようにブロックの形成要因はさまざま、各ブロックで行われた作業の違いは、石器の種類や組み合わせに反映されています。

柏北部東地区をはじめ下総台地のブロックの大きさは、直径4～5mが平均サイズであり、遺物量は関東の他の都県に比べ零細です。このことは、石材に乏しい地域、すなわち消費地の在り方をよくあらわしています。逆に石材が潤沢な地域では、ブロックが大型で遺物の分布密度も濃密で、石材を無駄遣いする傾向にあります。

2 暮らしの移り変わり

旧石器を含む関東ローム層は、当時盛んであった火山活動によって運ばれた火山灰をもとに生成されています。このローム層は、主に古富士火山（古期の富士山）の火山灰で構成され、その厚さは地表下約2mです。

一般的に下総台地のローム層は大きく8枚（Ⅲ～Ⅹ層）に分層され、それぞれの土層の年代は測定されており、石器の年代は発見された土層から判断できます。

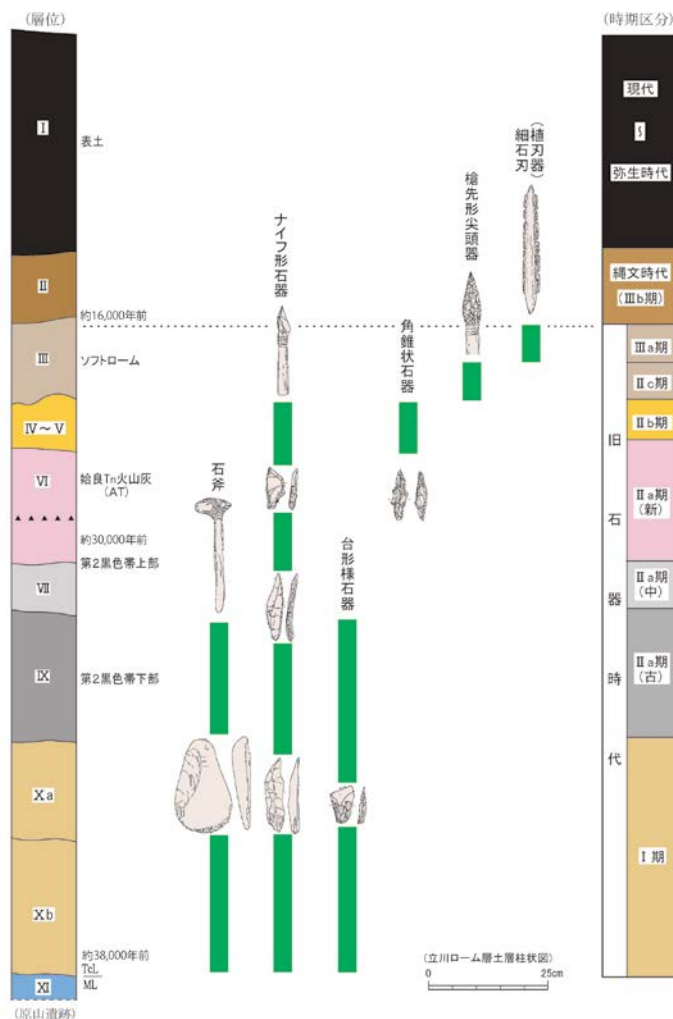


図5 石器群の変遷

千葉県では石器群の時間的な対比を行うとき、I期（ナイフ形石器文化の前段階）、II期（ナイフ形石器文化）、III期（ナイフ形石器文化に後続する細石器、尖頭器等の段階）という時期区分を柱として、層位的出土状況、石器製作技術及び石器組成により、これをさらに細分しています。

I期は最古の段階であり、出土層位はⅩ層、年代は38,000～35,000年前で、日本列島で確認される最古の石器文化の段階です。II期は、ナイフ形石器が主体となる時期であり、旧石器時代の中でも最も長きにわたる時期で、出土層位

はⅨ～Ⅲ層です。石器製作技術や石器の組み合わせにより三つに大別（Ⅱ a～c期）され、さらにⅡ a期については、古・中・新に細分されています。年代は、35,000年～18,000年前とされています。Ⅲ期はナイフ形石器消滅以降の時期で、出土層位はⅢ～Ⅱ層。細石器の段階（Ⅲ a期）と、石斧と大型尖頭器の段階（Ⅲ b期）に細分されます。年代は18,000～15,000年前とされています。

遺跡数はⅡ期（特にⅡ b期）がピークであり、初源期のⅠ期や終末期のⅢ期は減少傾向にある。中でもⅢ a期はひとときわ零細であり二、三にとどまります。

以上の石器群の移り変わりや遺跡数の増減は、関東全域の状況によく調和しています。

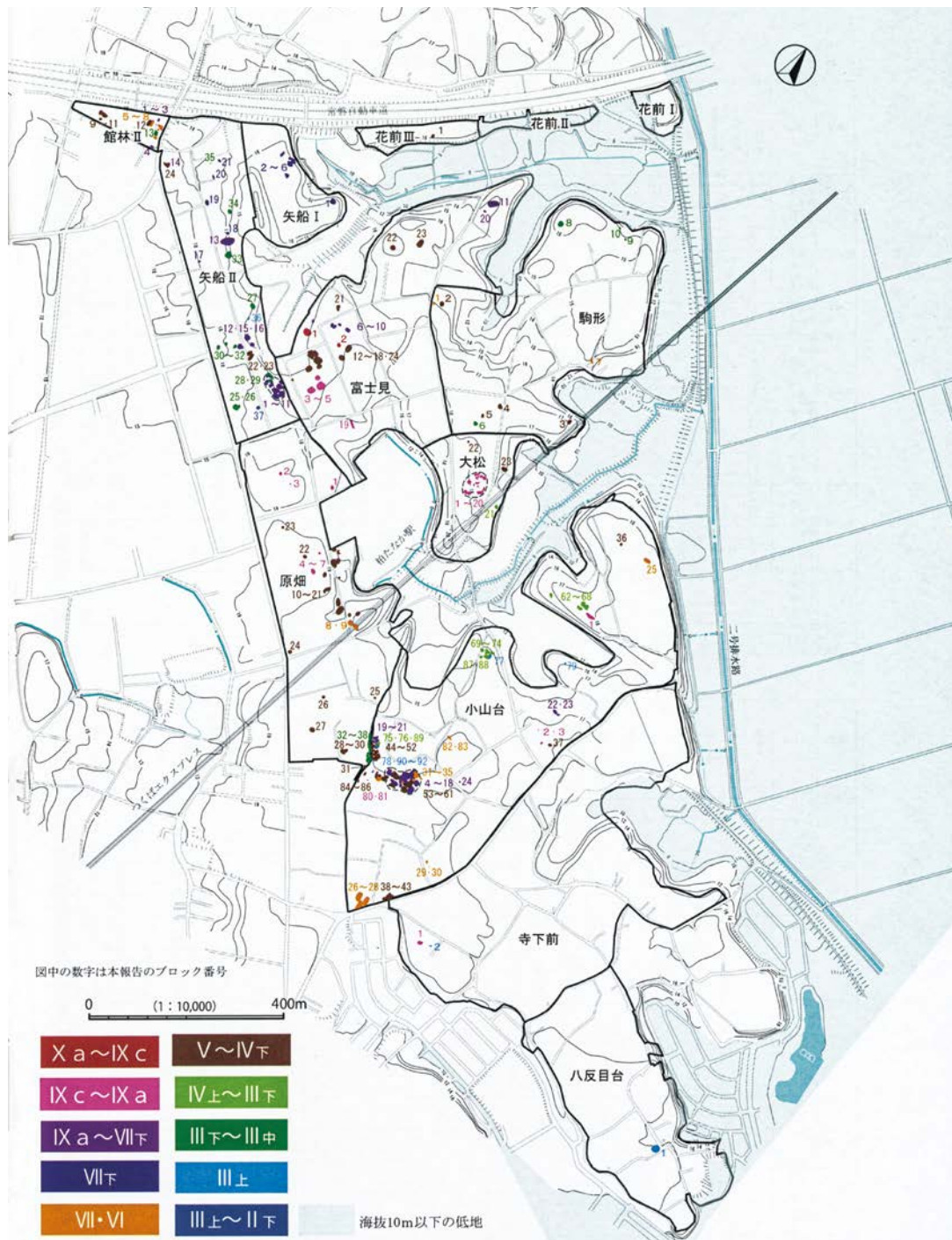


図6 柏北部東地区の遺跡と出土層位別のブロック分布図

3 旧石器人の知恵と交流

旧石器時代にはさまざまな石器が考案されたが、機能や形態が現代の道具に類似しています。これらの石器の製作技術から、先人の知恵や道具のルーツを学ぶことができます。

また、石器石材の産地の解明は、旧石器人の動きを知る上での手がかりとなります。石材は様々な地域から運ばれており、**ガラス質黒色安山岩**、**流紋岩**、**チャート**、**メノウ**などの北関東の石材に、**信州**、**伊豆・箱根**、**高原山**及び**神津島**の**黒曜石**や東北地方の**硬質頁岩**が加わります。今では、**栃木県南部**から**千葉県北西部**に連なる台地は、**利根川**や**利根運河**で寸断されていますが、かつては地続きであったことがわかっています。おそらく当時は、主にこのルートを通して北関東から**柏市内**に石材や石器が搬入されたのでしょう。

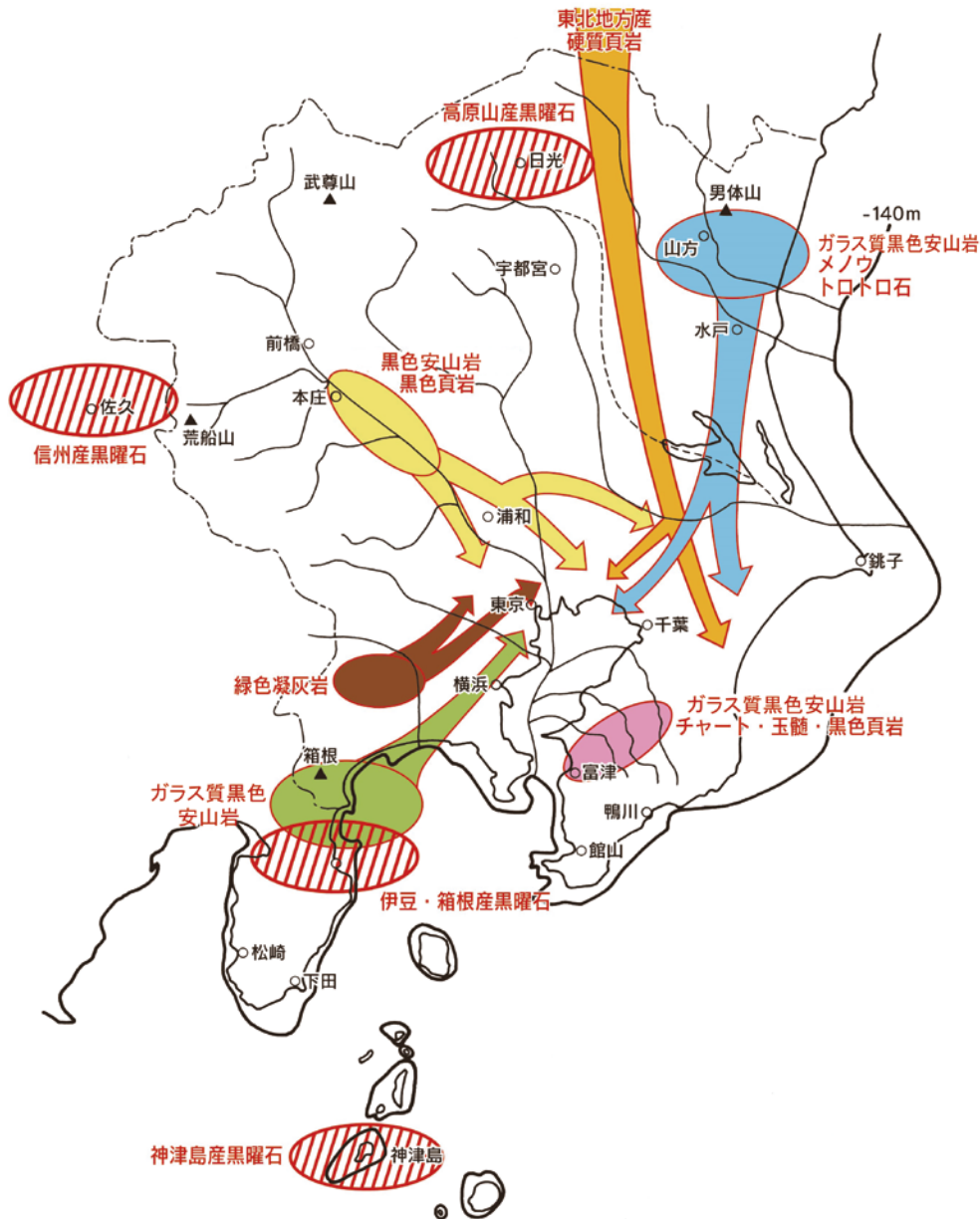


図7 石器石材の産地と石材の交流

第Ⅱ部 縄文時代

柏市北部東地区は長らく農業地帯で、開発事業に伴う発掘調査は稀でした。ところが平成10年度から平成28年度まで行った柏北部東地区の大規模な発掘調査で、予想外の縄文時代の成果が得られました。今回の展示では主要な成果である縄文前期と中期のムラについて、4つの単元と1つのトピックスで紹介します。

1 土器から見たムラの移りかわり

柏北部東地区では、早期初頭から晩期終末まで断続的に土器が出土しています。このうち、ムラの跡が見つかっている主要な時期は、前期初頭～末葉と中期前葉～後葉です。

(1) 前期のムラ

前期初頭～中葉の土器は胎土に繊維を多く含み、多様多様な縄文が主に用いられる羽状縄文土器群と総称されます。後葉～末葉は貝殻や竹管を工具として用いた各種の沈線文や爪形文が描かれ、低平な隆起線文や突起などの立体的な装飾も施されるようになります。



図8 ニツ木式



図9 関山式



図10 黒浜式



図11 浮島式(貝殻文)



図12 浮島式(竹管文)



図13 諸磯式

草創期	(隆線文系) (爪形文系) (多縄文系)	井草Ⅰ 大丸・井草Ⅱ 夏島 稻荷台 稻荷原・花輪台 平坂
早期	燃糸文系	三戸 田戸下層 田戸上層
	沈線文系	
前期	条痕文系	子母口 野島 鵜ガ島台 茅山下層 茅山上層 打越 神ノ木台 下吉井 花積下層 ニツ木 関山Ⅰ 関山Ⅱ 黒浜
	羽状縄文系	
中期	諸磯a・浮島Ⅰa 諸磯b古・浮島Ⅰb 諸磯b中・浮島Ⅱ 諸磯b新・浮島Ⅲ 諸磯c・興津Ⅰ 十三菩提・興津Ⅱ	五領ヶ台Ⅰ 五領ヶ台Ⅱ・阿玉台Ⅰa 勝坂Ⅰ・阿玉台Ⅰb 勝坂Ⅱ・阿玉台Ⅱ(古) 勝坂Ⅲ・阿玉台Ⅱ(新) 勝坂Ⅳ・阿玉台Ⅲ 勝坂Ⅴ 中峠 阿玉台Ⅳ 加曾利EⅠ 類型 加曾利EⅡ 加曾利EⅢ 加曾利EⅣ
後期	称名寺Ⅰ 称名寺Ⅱ 堀之内1 堀之内2 加曾利B1 加曾利B2 加曾利B3 曾谷 安行1 安行2	
晩期	安行3a 安行3b・姥山 安行3c・前浦Ⅰ 安行3d・前浦Ⅱ 千網 荒海	

図14 千葉県を中心とした縄文土器編年

前期のムラでは駒形遺跡、富士見遺跡、大松遺跡を中心に、住居跡は全体で347軒見つかっています。特に黒浜式期では富士見遺跡をはじめとして255軒見つかっており、富士見遺跡・駒形遺跡・大松遺跡・小山台遺跡の範囲に9か所ほどの環状あるいは列状のまとまりが認められます。おそらく、黒浜式期のムラとしては関東地方で最大級となるでしょう。

駒形遺跡では早期後葉条痕文期を皮切りに、事例の少ない前期初頭花積下層式期と前葉二ツ木式期から、関山式期、黒浜式期、浮島・諸磯式期、興津式期まで、長期断続的にムラが営まれています。

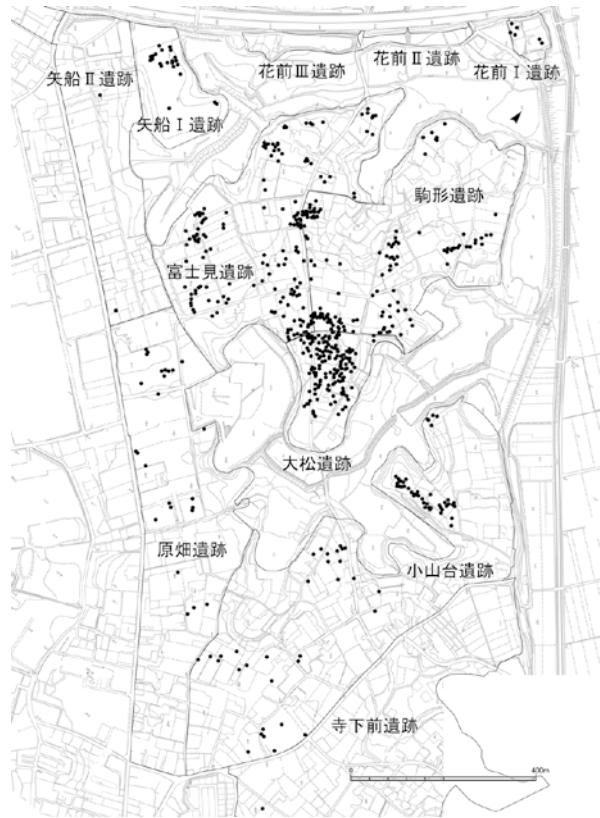


図15 前期のムラ

(2) 中期のムラ

中期になると、前期末葉に使われ始めた立体的な文様や装飾がさらに発達します。凸文様である隆起線文や把手・突起は高く大形になり、凹文様である沈線文や結節沈線文は凸文様とコラボレーションして立体感を演出しています。これら文様の種類や組み合わせは少しずつ異なりますが、中期前葉の東関東の阿玉台式、西関東の勝坂式、南東北の大木式にそれぞれ取り入れられています。柏市は千葉県マスコットキャラクター「チーバくん」の鼻先に近く、鼻先は関東平野に突っ込んだような位置にあります。そのような位置にあれば人や文化の交流は盛んであったと想像されますが、柏北部東地区の大松遺跡や小山台遺跡からはその証として、阿玉台式をはじめ勝坂式、大木式や、これらの型式の接触で生まれたり、遠隔地の文様要素も加えたりした土器群が出土しています。



図16 阿玉台式



図17 勝坂式



図18 大木式系



図19 勝坂・北陸・焼町系

後葉になると口縁部と胴部を区画した加曾利E式が成立して、関東地方で若干の地域差はあるものの、土器については齊一性が認められます。

しかしながら加曾利E式成立以前の中葉では人と文化の頻繁な交流の結果からか、中峠類型と総称される小範囲に分布し、顔つきの異なる複数の土器が認められます。



図20 中峠0地点型



図21 中峠5次2住型



図22 北50住型



図23 台耕地34住型



図24 小山台 (23) SI001型

下総台地の中期中葉から後葉期には、円形基調の広場をムラの中心に設け、その周りには群集貯蔵穴が作られ、さらにその外側には住居跡が囲む環状構造のムラ、いわゆる環状集落が形成されます。この環状集落は一定領域における拠点集落になります。柏北部東地区では大松遺跡で1か所、小山台遺跡で2か所の環状集落が近接して形成されています。この3か所のムラでは大松遺跡のムラが最初で、次いで小山台遺跡のAのムラ、Bのムラという順で人が住みはじめます。後葉のはじめ頃からしばらくは同時に3か所のムラが存在し、後葉の後半に相前後してムラは終焉を迎えます。

土器の様相や貯蔵穴の系譜から考えると、環状集落の成立には下総台地の人たちだけではなく、勝坂式分布圏である西関東の人たちや、大木式分布圏である北関東の人たちも関わっていたと思われる。

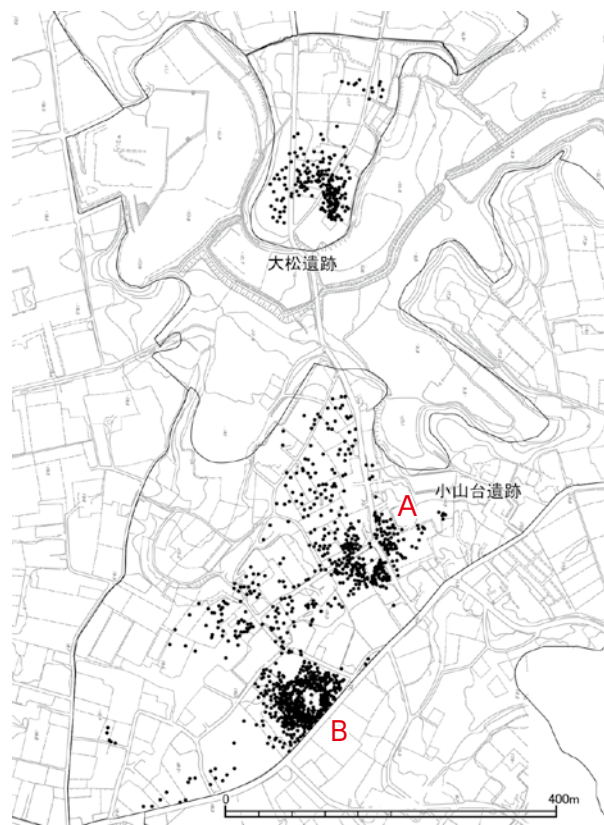


図25 中期のムラ

2 装身具とマジカルな道具

縄文人は石、土、琥珀、種実、骨、角、歯、貝などを加工して装身具を作っています。また、具体的な使用方法は明確ではありませんが、精神世界に関わると推測される土偶や石棒などが出土しています。

(1) 前期の装身具

前期には「玦状耳飾り」と呼ばれる、C字形の石製や土製の耳飾りが流行します。玦状耳飾りの装着は、C字の切れ目から耳たぶにあけた孔に入れ込んだと考えられています。図26・27のように完形品で出土することは稀で、図28は壊れた後に孔をあけて紐で繫いだと推測されます。

ほかには、首飾りにしていた長さ2.2cmの楕円形の玉が小山台遺跡から出土しています。

耳飾りや首飾りのほかに、腕には貝を加工した貝輪を装着していたことが、小山台遺跡の未成品から推測されます。



図26 石製玦状耳飾り



図27 石製玦状耳飾り



図28 石製玦状耳飾り



図29 土製玦状耳飾り

(2) 中期の装身具

① 大珠

中期になると、ヒスイ製の玉を作っていた生産遺跡が、新潟県糸魚川市の姫川下流域に出現します。姫川の支流である小滝川で、良質なヒスイが産出することが知られています。この時期に生産されたヒスイ製品は大珠と呼ばれ、東日本を中心に全国各地に流通していきます。



図30 小滝川ヒスイ峡

大珠が発見される遺跡は、大松遺跡や小山台遺跡のような、ムラの中央に広場が形成される環状集落からが多くを占めています。今までに千葉県から出土したヒスイ製大珠は50点に満たない点数で、1遺跡から出土する大珠は1点か2点でした。小山台遺跡の5点という出土点数は、本県から出土したヒスイ製大珠の実に10分の1の点数になります。ムラを代表するような人物が佩用して

いたこともあったかもしれませんが。おそらく、遠来のヒスイの輝きに、多くの人目が引きつけられたことでしょう。

②その他の装身具

小型の垂飾や琥珀製の玉があります。土製装身具では、大松遺跡や小山台遺跡に鼓状や糸巻き状をした耳飾り（図32）があります。



図31 大珠

(3) 土偶とその他の意匠・造形

①土偶

土偶は小山台遺跡から1点（図33）出土したにすぎず、本地域での普遍化した状況は認められません。

②人面・動物突起

大松遺跡と小山台遺跡から人面突起が出土しています。小山台遺跡例（図34）は、やや上を向いた鼻が特徴な立体的な突起です。ほかに、動物形象と考えられる突起が付くことがあります。

③異形石器

性格がよく分からない石器を「異形石器」といいます。前期の駒形遺跡や中期の小山台遺跡から出土したJ字状の石器（図35）は「釣針形石器」と呼ばれていますが、用途は不明です。



図32 糸巻き状耳飾り



図33 土偶



図34 人面突起



図35 釣針形石器

(4) 精神世界の道具

石棒

石棒は磨製の石製品の一つで、祭祀に使用されたものと考えられています。小山台遺跡からは4点の石棒が出土しています。いずれも欠損しており、被熱の痕跡が認められるものがあります。火を伴う祭祀に使われた可能性があることを示しているともいえましょう。

3 前期と中期の道具箱

今からおよそ一万数千年前、何度か寒冷な時期を挟みますが、地球規模の気候変動によって、総じて温暖で湿潤な気候の縄文時代が始まり、一万年以上続きました。この気候変動によって、周りの環境にある動物・植物相も変化したため、縄文人はそれらを手に入れるための新たな道具を発明したり、加工技術を獲得したりして、効率的に森林資源を獲得する狩猟・採集経済の時代を築きました。

これらの生産活動を支える主な道具として石器があります。狩猟には弓矢が使われますが、矢先には石鏃が装着されます。根茎類を掘り上げるには、打製石斧を装着した掘り棒が用いられたと考えられています。堅果類は石皿や磨石類ですり潰して製粉し、加工食材の原料にします。これら3つの生産活動がバランスよく行われたのか、時期や地域差によって利用傾向が異なるのかなど、石器の数量比で類推できるのです。

日常生活に必要な道具の中にも様々な石器があります。例えば木材の伐採や加工に用いた磨製石斧、衣類など日用品の孔開けに用いた石錐、皮なめし用の石匙などがあげられます。

それでは、柏北部東地区遺跡群の前期と中期の道具箱を覗いてみることにしましょう。

(1) 前期の道具箱

生産活動に関わる石器として、石鏃、打製石斧、石皿・磨石類などが出土しています。ここでは前期を通じて長期断続的にムラが営まれた駒形遺跡の内容を中心に示してみます。

石鏃は黒曜石製が少量あるほか、チャート製が目立ちます。黒曜石製は製品の状態でムラにもたらされたと考えられますが、チャートは初頭花積下層式期を中心として、製品のほかに未成品と多量の剥片が出土しています。中には住まなくなった住居跡の窪みや、礫群に伴った遺物集中地点から、まとまって出土しているものが認められます。チャートの礫は遺跡からそれほど遠くない礫層から調達できるので、ムラの中で石鏃を製作していたのかもしれませんが。

一定のサンプル数があった花積下層式期、二ツ木式期、黒浜式期の石鏃と打製石斧、石皿・磨石類の数量比を三角グラムで示すと、花積下層式期と二ツ木式期は石鏃＝狩猟に、黒浜式期は石皿・磨石類＝堅果類採集に傾斜することが

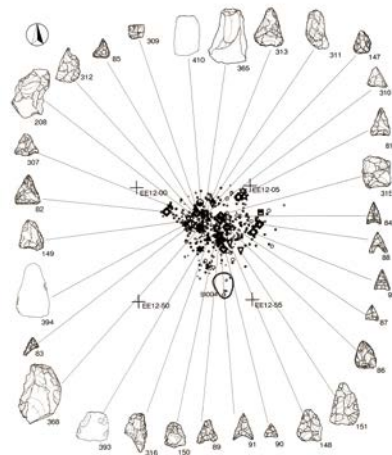


図36 石鏃製作跡

読み取れます。この傾向は千葉県北西部地区前期遺跡群の全体的傾向と調和的です。なお、この地域の関山式期では前半が前時期から継続して狩猟に傾斜し、後半は堅果類採集に傾斜して次の黒浜式期に繋がります。

生活用具では磨製石斧が出土していますが、前期に特徴的な乳棒状磨製石斧です。また、石錐や石匙も出土しており、石匙は縦型と横型があります。さらに、富士見遺跡などでは軽石を素材とした持ち手の付いた石冠状の製品が出土しています。下面に擦り面が認められるので、擦り込んで使ったのでしょうが、用途ははっきりしません。

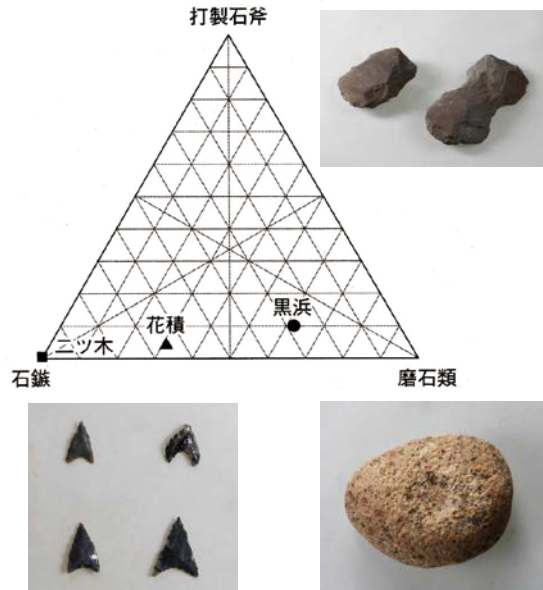


図37 前期の石器三角グラム



図38 磨製石斧



図39 石錐・石匙



図40 軽石製品

駒形遺跡や小山台遺跡から、別の器種の石器を再利用した石器が出土しています。図41は小山台遺跡出土の中葉黒浜式期の有撮石器ですが、旧石器時代の尖頭器を再加工したものです。尖頭器は全面的に風化していますが、撮みを作り出した両側の剝離は新たに施されたため、さほど風化していない様子が見て取れます。



図41 有撮石器

(2) 中期の道具箱

生産活動に関わる石器として、前期同様に石鏃、打製石斧、石皿・磨石類などが出土しています。ここでは中期中葉から後葉を中心に2つの環状のムラが営まれた小山台遺跡の内容を示してみます。



図42 石鏃

石鏃は基部が無茎で凹基ものが最も多く、平基のものも見られます。加えて有茎で舌部の付く桧ノ木型が4点出土しています。桧ノ木型は北関東を中心に分布する、後葉加曽利E式後半～後期堀之内式期に特徴的な石鏃です。小山台遺跡のものは加曽利E式後半の住居跡から出土しており、北関東地域との交流を示



図43 石鏃

しています。なお、石材はチャートと黒曜石がほとんどで、前期より黒曜石が増えています。チャート製は前期同様にムラの中で製作された可能性が高いです。生活用具では磨製石斧、石錐、石匙などが出土しています。



図44 打製石斧



図45 石皿・磨石類



図46 磨製石斧

小山台遺跡の3種類の石器の数を調べてみると、石鏃が未成品を含め約2,400点、打製石斧が未成品を含め約520点、石皿・磨石類が欠損品を含め約1,730点となり、石鏃＝狩猟に傾斜することが読み取れます。東京湾岸の拠点集落ではあらゆる森林資源をバランスよく利用していますが、小山台遺跡の傾向は、所属する古鬼怒湾水系の遺跡群の傾向と調和します。

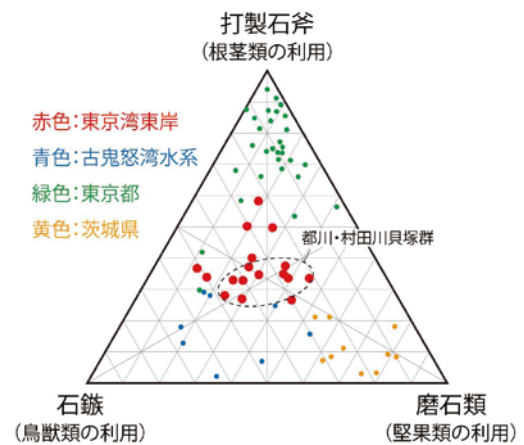


図47 中期各地域の石器三角グラム

4 貝塚のあるムラ・ないムラ

前項でお話しした温暖化・湿潤化によって、海の様子も変わりました。特に縄文時代早期後葉から前期中葉には温暖化・湿潤化が進んで海水面が上昇し、河川や谷筋を伝い台地側に海が侵入しました。これを縄文海進と呼んでいます。海進のピーク時の千葉県は、外洋と奥東京湾と古鬼怒湾という大きな内湾に囲まれ、「チーバくん」の鼻先で辛うじて関東平野の陸地とつながる島のような地形でした。

列島全体で身近になった海産資源を得るため漁労活動が活発化しますが、特に千葉県には日本にある貝塚のおよそ30%にあたる約700か所の貝塚が所在することから、狩猟・採集経済に漁労を加えた積極的な生産活動を展開したと考えられます。

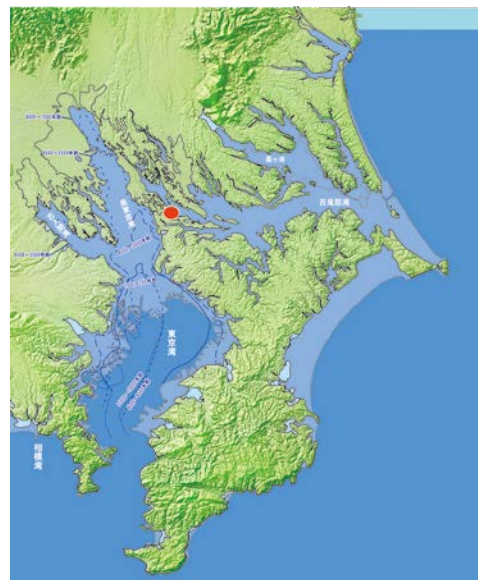


図48 縄文海進と柏北部東遺跡群の位置

(1) 貝塚のあるムラ

柏北部東地区では、使われなくなった住居や土坑の凹みに貝殻などを廃棄した遺構内貝層が形成されています。駒形遺跡の早期後葉条痕文期を皮切りに、前期花積下層式期～諸磯・浮島式期まで数多くの遺構内貝層が見つっています。貝類や魚を捕った漁場は、この地区が属する古鬼怒湾水系が想定されます。貝類の主要構成種は湾奥泥底干潟種のマガキ・ハイガイ・オキシジミと、内湾砂底種のハマグリ・アサリ・サルボオになります。駒形遺跡の花積下層式期の住居内貝層から魚類ではマダイ・スズキ属などが、哺乳類ではシカ・イヌ（狩猟犬?）が、植物遺体では炭化したクルミの果皮が出土しています。また、ハマグリの貝殻の腹縁に刃部を付けた貝刃が出土していますが、貝刃は魚の鱗取りに用いたと考えられています。

ところで、黒浜式期の貝層からは周辺の遺跡例と同様に動物遺体が検出されません。魚類や哺乳類を捕らなかったとは考えられませんので、廃棄様式が通例と異なる可能性があります、謎です。



図49 住居内貝層



図50 貝類



図51 動物遺体



図52 貝刃

(2) 貝塚のないムラ

前期末葉から中期中葉になると早期後葉から前期前葉にピークがあった海岸線が後退する海退が進みます。「チーバくん」の鼻先を挟む古鬼怒湾と奥東京湾が、湾奥部から手前に退いていきます。奥東京湾区の野田市・流山市周辺では貝塚を形成している中期中葉～後葉期の拠点集落がある一方で、柏北部東地区が所在する古鬼怒湾区では採取環境が悪化したためか、手賀沼東岸付近の柏市布瀬貝塚以西には貝塚がありません。柏北部東地区は奥東京湾区に接するのでそちらでの採取は可能なはずですが、小山台遺跡などで殻付きの海産貝を持ち込んだ形跡がありません。流通方法が異なったのか、何らかの規制があったのか、これもまた謎です。

漁労を行った可能性を示唆する道具として、漁網の錘と考えられる土器片錘、扁平礫を素材とした石錘、軽石製の浮子が出土しています。海水産資源利用の積極的な証拠は残っていませんが、併せて内水面漁労を行った可能性は残ります。



図53 土器片錘



図54 浮子

トピックス

発見!!「トンネル状遺構」

小山台遺跡の台地北端から斜面にかけて、16か所の竪坑とこれらと連繋する数か所に延びる横坑（トンネル）、掘削時の出入口となったスロープが一体となった迷路のような「トンネル状遺構」が発見されました。竪坑は径0.8～1.0m・深さ1.6mほどの円筒形で、横坑は平均の径が0.8mと人が屈んだ状態で前進できるサイズであり、トンネルは総延長で310m以上となるものです。いったい何の目的で掘られたものなのでしょうか？

①横坑他いずれにも人が踏みしめた硬い面があること。②人為による焼土や炭化物が埋め土に含まれていること。③焚火の跡や、埋め戻しが認められること。④竪坑に貝層を形成したり、浅鉢を伏せて置いたりしていること。以上のように人が掘ったことは間違いないと考えられる証拠が認められます。

横坑には径0.3mほどの人が掘ったとは思えない小動物の巣穴が続く箇所があることから、この小動物に関して横坑を拡張して掘り進め、内部から各所の竪坑を掘ったと調査担当者は考えています。この小動物はアナグマとと思われますが、アナグマは貝塚出土の動物遺体では数番目の多さです。「トンネル状遺構」は焚火による焙り出しを伴うようなアナグマ猟に関係する可能性が考えられています。

貝層の貝は付近の海で採取されたもので、鍋料理で食した後に灰とともに竪坑に廃棄されたものですが、色艶が鮮やかに残っていました。貝層には前期後葉浮島・諸磯式が伴っており、遺構の帰属時期を示すとともに、海退初期に海水産貝が生き残っていたことも示しています。

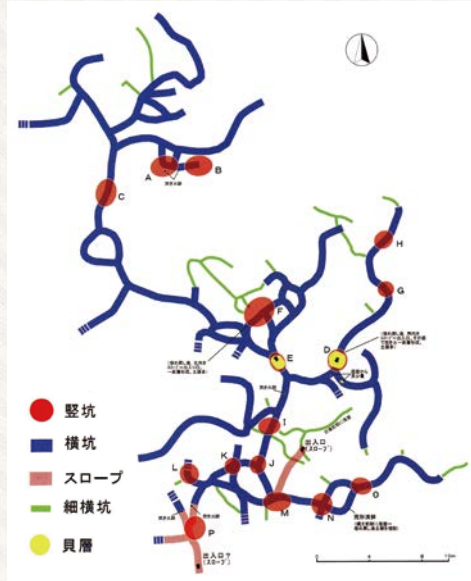


図55 トンネル状遺構模式図



図56 トンネル状遺構(ST001)



図57 焚き火跡



図58 出土したハマグリ(左)と竪坑の貝層(右)

第Ⅲ部 古墳時代

1 集落の変遷

柏北部東地区においては、縄文時代後期以降途絶えていた古人の足跡が、弥生時代後期に至ると、わずかではあるが認められるようになります。

古墳時代前期になると、柏北部東地区では、駒形遺跡・富士見遺跡・小山台遺跡A区で竪穴住居跡が検出されました。

古墳時代中期の遺跡としては、駒形遺跡・富士見遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡で竪穴住居跡が検出されました。矢船Ⅱ遺跡を中心として、古墳時代前期に比較すると増えていますが、大きな集落の形成まではしていません。

古墳時代後期になると、大松遺跡・八反目台遺跡で竪穴住居跡が検出されました。古墳時代後期の遺跡が極めて少なくなります。

柏北部東地区では、古墳時代全体を通して、検出した遺構は極めて少なく、単独ないしは少数であり、大きな集落は見当たりません。

柏市を含めた千葉県北西部では、柏北部東地区の集落と同じく古墳時代には大きな集落の存在は確認されていません。小規模の家族単位の集団が散在的に集落を形成していたようです。柏北部東地区の古墳時代の人々の活動痕跡は活況ではなかったことを示しています。

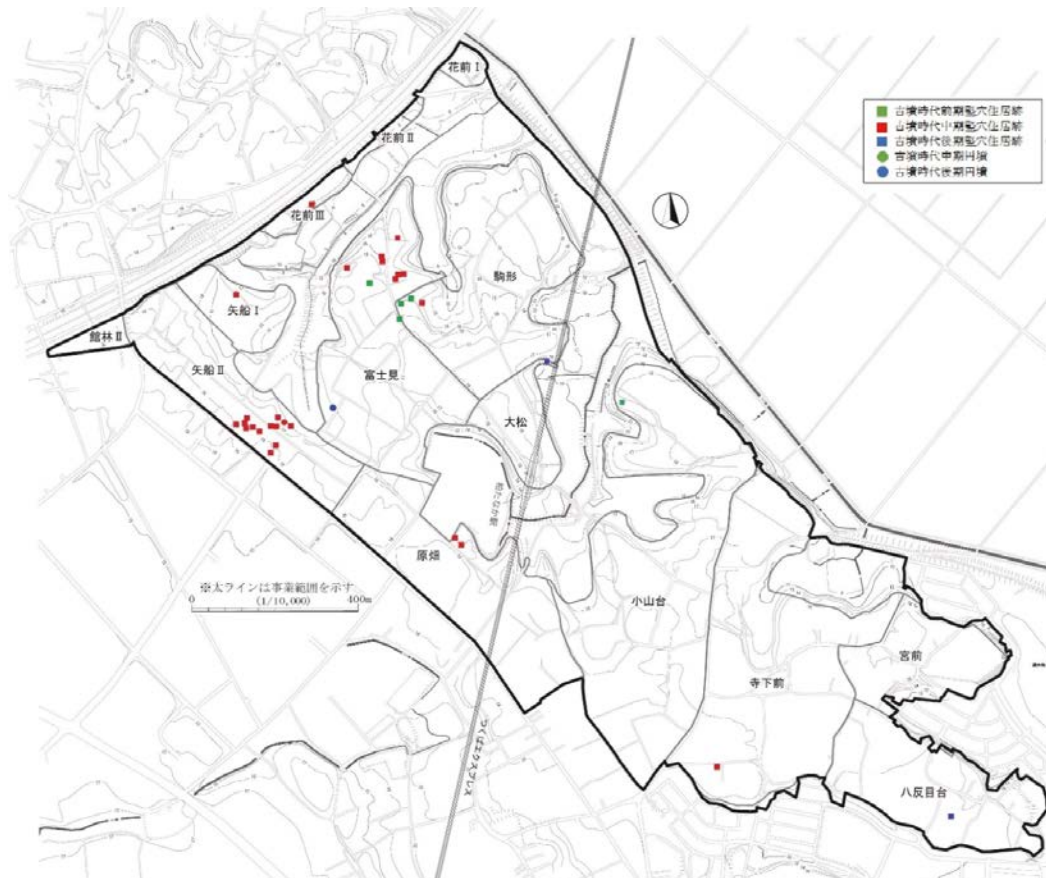


図59 柏北部東地区古墳時代遺構分布図

2 炉からカマドへ

炉は、縄文時代以来古墳時代の中頃まで、調理用はもとより、^{だんぼう}暖房や照明としての役割を果たしています。古墳時代の中頃には、房総半島において、カマドが普及します。これは、全国的な傾向で、カマドは朝鮮半島から^{ようぎょう}窯業技術とともに伝わり、急速に全国に普及しました。しかし、一部の地域では、炉からカマドへの変換が遅れるところもありました。

カマドは、竪穴住居の壁に造り付けられます。本体は山砂や粘土で構築し、土器(甕)を置く掛け口が設けられています。住居の壁を切り込んで煙道を造り、煙は外に出るような構造になっていました。

カマドの出現によって、縄文時代以来の炉は姿を消すとともに、竪穴住居の構造に大きな変革がおきました。煮炊きの場が壁際に移動するとともに、貯蔵穴もカマド脇に移動します。そのことにより、カマドと貯蔵穴を一体化した^{ちゅうぼう}厨房空間が明瞭となります。カマドの出現は、調理法の変化をもたらしました。カマドに据えた甕には水が入れられ、その上に甑をのせて、蒸し器のように使用したと想定されます。

それでは、柏北部東地区の炉からカマドの変遷を見てみましょう。

古墳時代前期から中期前半の住居跡からは炉が検出されています。前期の炉跡は柱と柱を結んだライン上に位置していますが、中期前半には、壁側に移動していく傾向が見て取れます。富士見遺跡SI106・SI131では、壁に接して炉を構築しています。富士見遺跡に隣接する駒形遺跡SI103では、初期カマドが検出されました。

SI103からは、^{えぼし}烏帽子形の炉器台が出土しており、炉からカマドへの変遷を考える上で貴重な資料です。この炉器台は、カマドが出現する前段階の炉において、煮炊きする甕を載せる台として使用されていた（上のイラスト参照）ものです。上のカマドのイラストのように囲われていないので、カマドより熱効

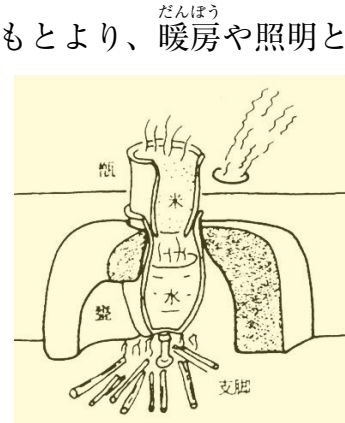


図60 カマド使用模式図



図61 富士見遺跡SI131



図62 駒形遺跡SI103カマド



図63 烏帽子形炉器台使用想定図

率が悪いことが見て取れるでしょう。

SI103の住人は、竪穴住居を新築した際に、炉を構築したが、最新式の調理施設であるカマドにリフォームして、生活をリニューアルしたのです。

3 祭祀に使用された土玉^{どだま}

古墳時代の竪穴住居跡からは、球状の土製品がときおり出土します。この球状土製品のことを、土玉と呼んでいます。その用途については、不明な点があります。土玉は、千葉県内では千葉・市原以北特に印旛沼周辺で多く出土している傾向があります。また、茨城県を含めると現在の利根川下流域から霞ヶ浦沿岸、旧常陸国と旧下総国にまたがる常総地域で多く出土しています。

この土玉は、真ん中に穴が貫通しており、何らかの紐を通したか、枝等に刺したりつるしたりした用途も考えられています。

石製模造品^{せきせい も ぞうひん}やあるいは手捏土器^{てづくね}との相伴からマツリの祭具^{さいぐ}を想定することができます。

柏北部東地区の土玉の出土状況を見ましょう。

右図は、寺下前遺跡SI005で、中期前半の竪穴住居跡です。土玉は21点、炉周辺に集中して出土しています。

駒形遺跡SI103は、中期中葉の竪穴住居跡で、初期カマドが検出されています。土玉は9点、カマド付近を含めた住居内に散在的に出土しています。このように炉やカマドを中心に出土しています。

他県の出土状況ですが、埼玉県桶川市楽中遺跡^{らくちゅう}では、カマド内から31個まとまって出土しており、カマド脇からは土玉の原料と思われる粘土の塊もあったことから、土玉を製作しマツリを行ったと想定される事例もあります。

柏北部東地区から出土した土玉は、炉やカマド周辺から出土することや石製模造品や手捏土器といった祭祀に関連する遺物に伴う例が多いことから、カマド祭祀を中心としたマツリに使用されたものと考えられます。



図64 駒形遺跡出土の土玉



図65 寺下前遺跡SI005土玉集中箇所



図66 楽中遺跡第5号住居跡カマド内土玉出土状況

4 石製模造品について

石製模造品は古墳時代中期から後期にかけての古墳の副葬品や祭祀遺構から見つかる遺物の一つで、石材は軟質の滑石で作られます。古墳時代中期前半は鉄製農耕具の斧、刀子、鑿、鉋、鎌が模造され、中期中頃になると勾玉、鏡、白玉などの服飾具や剣などの武器類、機織具、酒造具が加わります。初めは大型で実物を基にして精巧に作られ、少量です。その後は小型で作りが粗雑となり、大量に作られる傾向が見られます。

石製模造品を使ったマツリの様子ははっきりとわかっていませんが、鏡を模した有孔円板や剣形品は小さな孔がけられていることから、そこに紐を通し、樹木の枝に吊るされ、マツリを行っていたと考えられています。

県内では木更津市マミヤク遺跡や千束台遺跡などの祭祀遺構から大量の土器とともに見つかっています。また柏北部東地区周辺の古墳では松戸市河原塚1号墳から刀子の模造品が見つかっています。

柏北部東地区の寺下前遺跡、矢船Ⅱ遺跡の竪穴住居から剣形品・有孔円板とともに、製作道具の砥石などが見つかっています。竪穴住居跡から見つかる石製模造品は、古墳や祭祀遺構から見つかる石製模造品とは異なる目的でマツりに用いられたと考えられていて、小規模なムラの単位で日常の農耕儀礼に関わる祈りを目的に行っていたのではないのでしょうか。

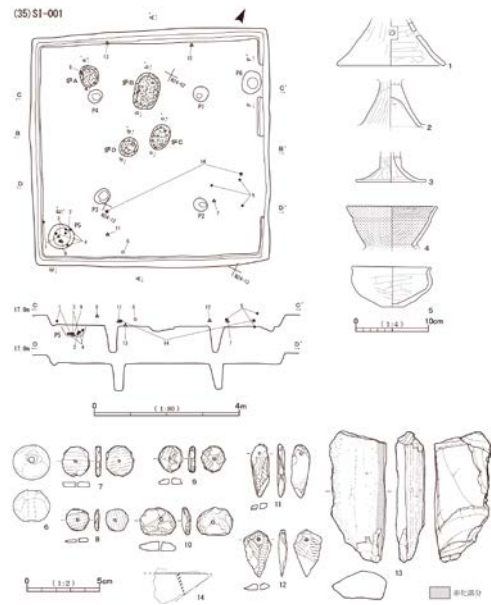


図67 矢船Ⅱ遺跡住居跡

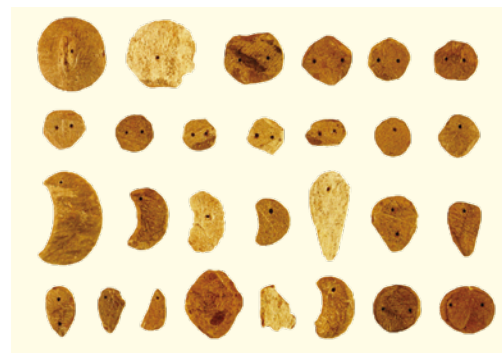


図68 木更津市マミヤク遺跡



図69 木更津市千束台遺跡

第Ⅳ部 中世・近世

1 中世人・近世人の足跡

柏北部東地区遺跡群の中で、中世・近世の遺構・遺物は、小山台遺跡B区、富士見遺跡などで確認されています。柏北部東地区で、中世の人の足跡が初めて確認されるのは、小山台遺跡B区で中世前期（12世紀代）です。

(小山台遺跡B区)

小山台遺跡B区の南東部で、方形周溝区画墓（SM002）が確認されています。溝で方形に区画した中に埋葬施設を築く、特別な墓です。「かわらけ」という素焼きの土器が副葬されていました。一般人の墓ではなく、この地域の草分け的開発領主の墓の可能性が考え

られます。また、14～15世紀代の板碑が出土しており、南東部が墓域として利用されていた可能性が考えられます。東側は、15世紀から16世紀末にかけての建物跡や地下式坑、土坑が検出されており、村落が営まれていました。また北側と南側で、土坑墓が作られます。北側は15世紀から16世紀中頃、南側は17世紀初頭のものです。



図70 SM002埋葬施設副葬品(かわらけ)



図71 SM002方形周溝区画墓



図72 SM001 お堂

図73 小山台遺跡B区南東部

近世になると、遺跡中央部に17～19世紀の建物が作られ、北西部や中央部に土坑墓が作られています。土坑墓は円形で粘土が貼られています。副葬品を伴うものは少ないですが、銭や煙管を入れたものも見られます。また溝跡やシシ穴など、獣の侵入を防ぐためと考えられる遺構も築かれています。

近世後期(18～19世紀)には、方形周溝区画墓(SM002)に隣接して堂(SM001)が築かれます。その配置はSM002を意識したようにもとれ、時間差はあるものの、この場所が特別な場所として意識されていて、その場所に宗教施設である堂が建てられた可能性が推測できます。

(富士見遺跡)

富士見遺跡では、15世紀になると、地面を掘り下げ、方形に区画した掘込区画(台地整形区画)が3か所見つかっています。規模は約30～37m程で、内部には地下式坑や土坑、井戸等が築かれており、これらは屋敷地及びそれに付随する墓地と考えられます。



図74 内耳土器(焙烙)

また、近世の掘立柱建物が2棟見つかっていますが、小規模なもので作業小屋の可能性が考えられます。さらに、道、畑の区画溝、高田台牧に関連する溝が検出されており、このことから村落の外れにあたるものと思われる。

(出土遺物の様相)

中世の出土遺物は、陶器では瀬戸美濃製品の皿、すり鉢、常滑製品では量は少ないが甕、片口鉢が見つかっています。この他に土器ではかわらけ、内耳土器(鍋)、すり鉢などが出土しています。これらは日常雑器が主体を占め、優品が少ないことから、一般村落であったと思われる。

近世の出土遺物は、瀬戸美濃の陶器、内耳土器(焙烙)やかわらけが出土しています。こちらも日常雑器が主体で、引き続き、一般村落であったと思われる。

2 高田台牧

流山市から柏市にかけて、近世では高田台牧が作られており、その関連遺構も見つかっています。柏北部地区は牧の東端部にあたり、確認されたシシ穴や溝等は、牧に隣接する村落の様相を表しているものと思われる。

江戸時代に、軍馬の他に輸送用・農耕用の駄馬を民間へ供給することを目的に、下総国に小金・佐倉牧という幕府直轄地が置かれていました。このうちの小金牧は、高田台・上野・中野・下野・印西の5牧で構成されていました



図75 柏北部東地区と高田台牧

図・写真出典・提供一覧

はじめに

図1 千葉県教育振興財団2018「柏北部東地区遺跡群位置図」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書14』千葉県教育振興財団調査報告第774集 加筆編集

第Ⅰ部 旧石器時代

図2・7 八街市2012『図解八街の歴史』より転載

図3 千葉県教育振興財団2015「富士見遺跡」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書7』千葉県教育振興財団調査報告第737集（千葉県教育委員会所蔵）

図4 千葉県教育振興財団2015『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書2』千葉県教育振興財団調査報告第631集 より転載

図5 流山市立博物館2015『ふるさと流山のあゆみ』

図6 千葉県教育振興財団2018『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書13』千葉県教育振興財団調査報告書第771集より転載

第Ⅱ部 縄文時代

図8・9・12・26・28・39・50～52 財団撮影 柏市駒形遺跡（千葉県教育委員会所蔵）

図10 財団撮影 柏市原畑遺跡（千葉県教育委員会所蔵）

図11・17・18・20・24・31・35・41～46・53・54 財団撮影 柏市小山台遺跡（千葉県教育委員会所蔵）

図13・38 財団撮影 柏市花前Ⅰ遺跡（千葉県教育委員会所蔵）

図14 財団作成

図15・25 上守秀明作成

図16・19・21～23 財団撮影 柏市大松遺跡（千葉県教育委員会所蔵）

図27・29・40 財団撮影 柏市富士見遺跡（千葉県教育委員会所蔵）

図30 小林清隆撮影

図32～34 千葉県教育振興財団2019「柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書15－柏市小山台遺跡B区－縄文時代以降編第4分冊」千葉県教育振興財団調査報告書第775集巻頭図版4を転載

図36 千葉県教育振興財団2013「柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書5－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編2」千葉県教育振興財団調査報告書第691集第81図を改変・財団撮影 柏市駒形遺跡

図37 上守秀明作成・財団撮影 柏市駒形遺跡（千葉県教育委員会所蔵）

図47 千葉県教育振興財団2019「eco生活事始め－考古資料から見た上手な資源の使い方－」令和元年度出土遺物公開事業展示図録図56を転載

図48 富士見市立水子貝塚資料館2022「埼玉の四大貝塚」展示リーフレット「縄文海進図と貝塚の分布」を改変

図49 千葉県教育振興財団2013「柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書5－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編2」千葉県教育振興財団調査報告書第691集図版11「SI115貝層断面-1」

- 図55 西野雅人氏作成
図56 千葉県教育振興財団2017「柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書12－柏市小山台遺跡A区－縄文時代以降編」千葉県教育振興財団調査報告書第770集巻頭図版1を転載
図57 財団保管
図58 西野雅人氏作成（左）・千葉県教育振興財団2009「房総の文化財47」今から約6,000年前の謎の地下道から転載（右）

第Ⅲ部 古墳時代

- 図59 千葉県教育振興財団2018「柏北部東地区遺跡群位置図」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書14』千葉県教育振興財団調査報告第774集 加筆編集
図60・63 千葉県文化財センター1984『房総考古学ライブラリー』6を加工
図61 千葉県教育振興財団2015「富士見遺跡」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書7』千葉県教育振興財団調査報告第736集 図版19より転載
図62 千葉県教育振興財団2013「駒形遺跡」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5』図版8より転載
図64 財団撮影 柏市駒形遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図65 千葉県教育振興財団2017「寺下前遺跡」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書11』千葉県教育振興財団調査報告第764集 「SI103」を加工
図66 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2017「楽中遺跡第5号住居跡カマド内土玉出土状況」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第429集より転載
図67 千葉県教育振興財団2017「矢船Ⅱ遺跡」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書11』千葉県教育振興財団調査報告第764集をより転載
図68 大阪府立近つ飛鳥博物館2012『王と首長の神まつり』大阪府立近つ飛鳥博物館図録57より転載
図69 財団法人君津郡市文化財センター1995広報誌『きみさらづ』第7号より転載

第Ⅳ部 中世・近世

- 図70 財団撮影 小山台遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図71～73 千葉県教育委員会提供 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15』千葉県教育振興財団調査報告書第775集 図版385
図74 財団撮影 小山台遺跡（千葉県教育委員会所蔵）
図75 柏市教育委員会2019『柏市史（原始古代中世 考古資料）』より転載

●発行日：令和4年7月21日

●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団 〒284-0003 四街道市鹿渡809-2

●印刷：株式会社エリート情報社

この図録は令和4年度国宝重要文化財等保存・活用事業補助金（地域の特色ある埋蔵文化財活用事業）の交付を受けて作成しています。